

氏 名	こ だま かず ひろ 児 玉 一 宏
学 位 の 種 類	博 士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 219 号
学位授与の日付	平成 16 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 人 間 ・ 環 境 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	A Usage-Based Approach to the Emergence of Early Linguistic Constructions—from a Cognitive Perspective— (認知的視点から見た用法基盤的アプローチによる子どもの構文習得研究)
論文調査委員	(主 査) 教 授 山 梨 正 明 教 授 大 木 充 助 教 授 川 崎 靖

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、認知言語学の用法基盤モデル(Usage-Based Model)に基づいて、日常言語の構文の拡張と習得のメカニズムの解明を試みた理論的・実証的研究である。全体は6章から成る。

第1章では、認知言語学のパラダイムに基づく用法基盤モデルの視点から、これまでの理論言語学の研究の背景となっている構文理論の批判的な検討がなされる。

第2章では、生成文法のパラダイムに基づくS. ピンカーの連結理論(Linking Theory)の英語与格構文の交替現象の分析に対する批判的な検討がなされる。連結理論では、与格交替にかかわる構文は、入力となる動詞の意味構造が、語彙規則によって出力となる動詞の意味構造に変換され、連結規則の働きにより統語構造が派生するというモデルが仮定されている。本章では、このモデルは、次の点で、与格構文の交替現象に関する記述と説明の妥当性に関し問題がある点を明らかにしている。すなわち、連結理論のモデルは、与格交替の構文のパラフレーズ性(ないしは同意性)を前提としているが、与格交替にかかわる構文相互の意味は、これらの構文を構成する動詞、名詞等の構成要素の意味の総和からは予測できない構文独自のゲシュタルト的な意味をになっている。また、連結理論のモデルは、連結規則の入力となる抽象的な意味構造を前提としているが、この種の意味構造の記述に導入されている原始述語(ないしは意味的プリミティブ)の心理的な実在性に関する裏づけがなされていない。本章は、連結理論のモデルに関する以上の問題点を指摘している。

第3章では、A. ゴールドバーグの構文文法(Construction Grammar)のアプローチを批判的に検討し、拡張ネットワークモデルに基づき、与格構文の交替現象の一般的な記述と説明を試みている。特に、英語の与格構文の特殊例として注目される使役移動構文と二重目的語構文の表層レベルの分布関係を、構文間のメタファー的拡張とメトニミー的拡張のネットワークモデルに基づいて体系的に規定している。本章では、さらにこれらの二種の特殊構文のうち、後者の二重目的語構文の下位類を構成する事象目的語構文の拡張のプロセス(より厳密には、プロトタイプの二重目的語構文からの拡張のプロセス)を、構文のメタファー的な継承リンクのモデルに基づいて定式化している。また、本章では、この種の構文現象は、第2章で考察したピンカーの連結理論に基づく構文モデルとゴールドバーグの項構造の理論に基づく構文モデルのいずれに対しても重要な反例となる現象である点を明らかにしている。

第4章では、認知言語学のパラダイムに基づく用法基盤モデルの観点から、ピンカーとゴールドバーグの二重目的語構文の拡張と習得の仮説に対する批判的な検討がなされる。基本的に、構文の拡張は、プロトタイプからの拡張とスキーマからの事例化というダイナミックな認知プロセスに基づいている。本章では、この認知的な観点から、まずピンカーの連結理論の構文モデルの問題点を指摘する。ピンカーの構文モデルは、二重目的語構文として具現化している動詞には、基本的に[X CAUSE Z TO HAVE Y]の概念構造によって特徴づけられる主題核が一律に存在し、この概念構造から統語構造への写像は普遍的な連結規則によると仮定している。しかし、この種の写像に基づく派生的な規定では、行為の力の推移にかかわる事象目的語構文の拡張事例の一般的な予測は不可能である。また、この種の拡張事例の存在は、生得的な言語獲得機構

を仮定する連結理論の重大な反例となる。また、二重目的語構文の拡張事例は、ゴールドバーグの体系的メタファーによる構文分析に対しても問題となる。ゴールドバーグの構文分析は、体系的メタファーによる構文の拡張は、二重目的語構文だけに限られる現象であると主張している。しかし、本章では、体系的メタファーによる拡張は、二重目的語構文だけでなく to-前置詞句を伴う与格構文にも観察される点を指摘している。また、本章では、二重目的語構文、to-前置詞句を伴う与格構文等の多様な拡張事例の分布関係を、プロトタイプからの拡張とスキーマからの事例化のメカニズムに基づく用法基盤モデルにより体系的に説明している。

第5章では、用法基盤モデルの観点から、構文の拡張現象と構文の習得のメカニズムの問題を考察している。本章の前半では、第3章と第4章で考察した広範な拡張構文の分析に基づき、M. トマセロの特定項目依存の構文拡張モデルを批判的に検討している。特に、本章では、特定項目依存の構文拡張のモデルに対し、部分スキーマの構文拡張モデルを提唱し、具体事例からの部分スキーマの抽出、類似表現の入力による部分スキーマの強化のプロセスが、日常言語の構文の創造的な拡張のメカニズムの基盤の一部を形成している事実を明らかにしている。また、本章の後半では、日本語の母語話者（2歳から3歳6ヶ月）の初期構文パターンの形成とその拡張のプロセスを、用法基盤モデルの拡張ネットワークに基づいて定式化し、記述面、実証面からみた同モデルの妥当性を示している。

第6章では、理論面・実証面からみた用法基盤モデルに基づく構文研究の意義と展望が論じられている。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、認知言語学の用法基盤モデル(Usage-Based Model)に基づく日常言語の構文の拡張と習得のメカニズムの理論的・実証的研究である。

理論言語学の分野における従来の構文理論、特にその代表的な理論である S. ピンカーの連結理論(Linking Theory)では、入力となる動詞の意味構造が、語彙規則によって出力となる動詞の意味構造に変換され、連結規則の働きにより統語構造が派生するというモデルが仮定されている。この理論では、個々の構文の間に、抽象的な連結規則によるパラフレーズ関係は認められるが、基本的（ないしはプロトタイプの）な構文と、拡張構文（ないしは周辺的な構文）の区別はなされていない。これに対し本研究は、日常言語の構文は、基本構文から拡張構文へと放射状カテゴリーを成して分布している事実を明らかにしている。本研究の独創的な点は、用法基盤モデルの拡張ネットワークの関係（特に、このモデルの中核部分を構成するメタファー・リンク、メトニミー・リンク等の継承リンクの関係）に基づいて、二重目的語構文と与格構文を中心とする日常言語の構文の拡張現象の体系的なモデル化を行っている点にある。また、本研究では、(i) 連結理論が前提とする構文の意味が、統語計算に基づく構成要素の意味からは予測できない点、(ii) 連結理論の意味構造の記述項である原始述語の心理的な実在性の裏づけがなされていない点を指摘している。本研究が指摘する (i)、(ii) の問題は、連結理論に代表される統語計算に基づく構文理論の妥当性を検討していく上で重要な意味をもつ。

連結理論は、普遍的な原理である連結規則(linking rules)の存在とその自律性を前提とする理論であり、構文自体は、自律的な統語計算の付帯現象として捉えられ、構文の認知的実在性には積極的な意義は認められていない。また、この理論では、個々の構文それ自体がになうゲシュタルト的な意味の予測は不可能である。本研究の注目すべき点は、認知言語学のパラダイムを背景とする A. ゴールドバーグの構文文法(Construction Grammar)のモデルを組み込む用法基盤モデルに基づいて、二重目的語構文、与格構文等の構文自体がになうゲシュタルト的な意味のパターンを、構文ユニットそれ自体の意味の慣用化のプロセスと、個々の構文が指示する基本的事態の概念化のプロセスに基づいて定式化している点にある。

本学位申請論文の独創的な点は、さらに用法基盤モデルの観点から、これまでの認知言語学の研究では本格的な分析がなされなかった、構文の拡張現象と構文の習得のメカニズムの関係を考察している点にある。本研究では、二重目的語構文、与格構文等の広範な拡張構文の分析に基づき、認知言語学の主要な言語習得モデルである M. トマセロの特定項目依存の構文拡張モデルを批判的に検討している。特に、本研究では、トマセロの特定項目依存の構文拡張モデルの改訂モデルとして、スキーマ依存の構文拡張モデルを提唱し、具体事例からの部分スキーマの抽出、類似表現の入力による部分スキーマの強化のプロセスが、(i) 母語話者の初期の言語習得の段階（2歳から3歳6ヶ月）における構文の拡張の基盤を形成すると同時に、(ii) 大人の構文拡張のメカニズムの基盤の一部を形成している事実を明らかにしている。以上の事実の解明は、日

常言語における基本構文と複合構文の習得過程のモデルを検証していく上で重要な意味をもつ。

言語学における記述と説明の妥当性の観点からみた場合、本研究は、さらに次の点で従来の理論言語学における構文研究と比べて、構文現象に関しより包括的で体系的な説明を可能とする。本研究は、字義通りの意味をになう構文現象だけでなく、メタファー、アナロジー等の認知プロセスを動機づけとする基本構文から拡張構文への構文の創発性を反映する言語現象の体系的な説明を可能とする。これに対し、これまでの統語論の自律性を前提とする構文分析のアプローチは、字義通りの意味をになう基本構文の分析に限定されており、以上のような構文の創造的な拡張にかかわる言語現象の体系的な説明は不可能である。これまでの言語学の分野における構文分析では、構文の創造的な拡張にかかわるこの種の体系的な分析は試みられていない。

本研究は、主に共時的な視点と言語習得の視点からみた構文の拡張現象の分析を主眼としており、日常言語の通時的、歴史的な視点からの構文分析の適用はなされていない。しかし、本研究の視点からの構文拡張の分析を進めていくならば、動的な言葉の変容プロセスによって特徴づけられる記号系の創造性のメカニズムの一面を、より体系的に分析していくことが可能となる。本研究は、記号の創造性のメカニズムを一般的に解明していくための基礎研究としても注目される。

本申請者が所属する環境情報認知論講座の目的の一つは、言語、認識、思考、推論等にかかわる人間の知のメカニズムの解明にあるが、本研究は、この目的に沿った言語学の研究として高く評価できると共に、今後の言語学と認知科学の関連分野への貢献がさらに期待される。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成16年1月23日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果合格と認めた。